

6月末、利尻島、礼文島へ行くと言う友人達に誘われて、羽田に前泊して早朝羽田を発って旭川空港へと9時頃着きました。

その日は旭川から札幌へと周遊して、次の日に新千歳空港から凡そ50分の飛行で利尻空港へと着きました。

日本の名山百選の一つ、1,721 mの「利尻富士」は鮮やかな藍色の山肌に白い雪が残り、頂上付近はいつみても白い雲がかかり、とうとう帰る日まで顔を見せてくれませんでした。

利尻島は人口凡そ5,600人、隣の礼文島は凡そ3,000人ですから両島で8,600人であります。面積は利尻島が182km<sup>2</sup>、礼文島が81km<sup>2</sup>であり、君津市凡そ9万人、320km<sup>2</sup>であります。

北緯45度に位置する日本最北端の日本海へ浮かぶ島であります。島の博物館には戦前、鯨と鱈の漁場で繁栄を極めた島の風景が絵や写真で飾られ、魚具や漁船のモデル、実物が展示されて、往時の豊かさを物語っております。

今この利尻島、礼文島の産業は豊富な魚介類であり、利尻昆布は京都大阪関西の高級料理店では欠かせない昆布だそうです。

海の底でこの昆布を食べて育ったウニはまさに絶品ですと閉店間際の1貫500円のウニ寿司の店には客が列をなしており、私も並んだ一人であります。その夜は利尻島鷺泊港近くのホテルに泊まり宴会になりましたが、20歳台の若く美人揃いのホステスさんが4~5名来られたので思わず「島の方達ですか？」と聞くと「私は大阪あちらは富山と新潟・・・夏の観光シーズンになるとこの島へと応援に来るんですよ」と言われました。

そう言えば羽田から旭川への飛行機も新千歳から利尻への飛行機も満席でした。次の日の礼文島から稚内港へ渡るフェリーもすべて満席でした。明日は島の観光バスだけでは足りないので、稚内から大型観光バスが10台応援に来ますと教えられましたが、この島の不思議さはこれだけ人が来られても渋滞、大混雑しない事であります。

標高1721 mの利尻富士を目指す人、490 mの礼文岳を登る人、道が狭いので大型バスは山裾で、老若男女の人々が気負い込んだ様子もなく1バス毎に三々五々ゆっくりのんびりと頂上を目指して登っていく姿は、内地では見られない風景であります。

かつて北海道の「カニ族」と言われた観光スタイルがこの島にはそのまま残っている？この2つの島の人口は併せて8,600人、ほとんどが漁業専従者、夏は凡そ20万人の観光客が2つの島を周遊する。この季節になると登山ガイド、観光ガイド、観光バス、ホステス・・・等が関西、信越から応援に来て島の観光を助けて盛り上げる。飛行機もフェリーも満席だが、日に何便と回数が少ないので島の許容量と間合いのバランスがよく取れている。6月末内地では気温39度を越えたのにこの島は16度、北海の孤島、見るものは小さな山と丘と絶壁の青い海、群生する高山植物、新鮮な海の幸、ゆったりと時が流れて行くひなびた漁村、人は今、旅に何を求め始めているのだろうか？